

プリキュアオールスターズ・Darkness☒Quartzer☒

オルター

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この本によれば、とある世界では伝説の戦士“プリキユア”と呼ばれる少女達が、世界を滅ぼそうとする悪の怪人達と戦っていた。

その物語に1人のイレギュラーたる青年が組み込まれる。

そして神から悪の戦士“ダークライダー”の力を授かった彼は、プリキユアと共に戦い、生き抜いて行く。

戦いの先に彼の瞳に映るもの、それは…

おっと失礼、先まで読み過ぎました。

※オリ主の名前を変更しました。

目次

第1話	序章	1
第2話	転生と戦闘	6

## 第1話 序章

この世にある世界、それは1つだけではない。

人間には様々な可能性があるように、世界にも様々な可能性が存在するのだ。その可能性から生まれた世界、それこそが“パラレルワールド”である。

そしてこれから語るのは、とある可能性から生まれた1つの物語。

誕生した世界がどのような物だったとしても、そこには必ず“理由のない悪意”というものが存在している。

その悪意は様々な形で私達の目前に現れては、世界を闇に引きずり込もうとする。

しかし、正義とは悪からい出るもの。悪がその世界にあれば正義もまた存在するのだ。

この世界に現れた正義の戦士達。それこそが“プリキュア”、伝説の戦士の異名を持つ少女達である。

色とりどりの可愛らしい衣装に身を包みながらも、身体から発せられる力は、常人を遥かに上回る。その力で、彼女達は世界を守ってきた。

そんな彩やかな歯車が数々と並ぶ物語に、もう1つの歯車が追加された。

この世界で悪と戦う正義の戦士は、プリキュアだけではない。

その戦士はどこからともなく現れては、プリキュアと共に正義の為に戦っていた。

だがその見た目は彼女達と正反対であり、全身が強固な鎧に覆われている。そしてその姿も様々であった。

ある時は黒い龍騎士、ある時は金色の昆虫。白い死神に金色の魔法使い。紫のゲームキャラにマゼンタ色の隼、その本当の姿を知るものは少ない。

しかし、戦士にはたった1つの共通点がある。

その戦士は時にバイクに乗っているのだ。バイクに乗る人物は、基本的に“ライダー”と呼ばれている。

鎧と共に仮面で覆われた姿。バイクに乗り、悪と戦う正義の味方。人は彼等を……いや、彼を

“仮面ライダー”と呼ぶ。



―神奈川県 横浜市―

時刻は夜の23時。空には黄色い満月が浮かんでおり、誰もが寝静まっているであろう時間だ。町外れにある森の中には当然人などおらず、虫の鳴き声が聞こえるだけである。

そんな森の中に、虫とは違う1つの異形がいた。

全身が黒く染まっており、上半身はまるで前後から押し潰されたかのように平らで、両腕にはハンマーを模した何かが生えている。そして顔と呼ぶべき部分には垂れ下がった赤い目のような模様しか確認出来ない。

その異形に付けられた名前は“プレスクロースマツシュ”。嘗て仮面ライダービルドが戦っていた怪人である。

恐らくは並行世界から迷い込んだであろうこの怪人だが、生憎自我は存在しておらず本能のままに戦う異形は、獲物を探し森を彷徨い続けていた。

森の中をただ歩き続ける異形。その先に佇む影を視界に捉えた瞬間、歩く足を一度止めた。

その影は紛れもない人型だった。

全身が紫色のアンダースーツに覆われており、身体の至る所にダークグレーのアーマーが、サスペンダーのようなベルトに固定される形で取り付けられている。頭部にも同じようにアーマーが付けられていてその隙間から、長方形をそれぞれ左右に傾けたような黄色い光る複眼がその先を見つめている。

腰には黄色いレバーのようなものが付いた黒と銀色のベルトが装着されており、そのベルトにはサソリの骨格が表示された何かが銀色のバンドに固定されるように差し込まれていた。

人型は、右手にアタッシュケースを変形させたような弓を構える。そしてベルトの横に取り付けられたホルダーのようなものから、蛍光グリーンと黒のデバイスを取り出すとボタンを押して起動させる。

『ストロング！』

すると人型は、起動させたデバイスを弓型の武装に装填する。

『ヘラクレスビートルズアビリティ！』



―横浜市 某所―

「ありがとうございます、またお願いします！」

僕はレジでお客様の会計を終えると、ぺこりとお辞儀をしながら送る。お客さんも喜びの表情で軽く頭を下げると、ドアを開けて店を出ていく。

時刻は夜の21時頃。最後の客が出ていった後に、僕は入り口のドアにぶら下げたプレートを裏返して『OPEN』から『CLOSED』の表示にすると、中に入って鍵を掛けた。

僕は今、横浜の街にあるレストランの店主として働いている。今日も日中は繁盛していて、多くのお客さんに喜んで貰えたから何よりだ。

閉店の後始末を終えると、僕は階段を上がって自分の部屋に行きベッドに横になる。

「今日も疲れたなあ…」

無意識に僕はそう呟いた。このレストランは僕一人だけで営業している為、客が多いとどうしても忙しくなってしまうのだ。従業員の募集も考えたけど、誰かに教えるのは得意じゃないから一人で全て受け持ちだ。

でも僕は、収入以上のものをこの仕事で得ている。お客さんが僕の料理を食べると、皆が喜んでくれる。その笑顔を見ると、僕も自然と元気が出てくる。

僕はベッドから起き上がると、部屋の隅に置かれた机の椅子に座る。机の上には大量の物体が置かれていた。

黒い龍と紫の蛇の紋章が刻印された四角いケースのようなもの、赤青黄紫のボタンが取り付けられた銀色のベルトと黒いパス。黒い手形が付いたベルトに、ゲームカセットや色とりどりのボトル、動物が

描かれた四角いデバイスなど、今の僕が持っているものを全て挙げればキリがない。

そう言えば、自己紹介がまだだったね。

僕は“ことのは琴葉こう虹”。この『レストランAGITΩ』の店主を務めている20歳。

そして：プリキュアという光の戦士が存在するこの世界の中で、たった1人の戦士にして異物…

“仮面ライダー”だ。



## 第2話 転生と戦闘

どうも皆さん、琴葉 虹です。

突然ですが、今から僕がダークライダーの力を授かってプリキュアの世界に行くことになったきっかけを話したいと思います。

まず、僕はごく普通の20歳のバリバリ社会人でした。

あの時までは…

休日のある日、僕は街中をぶらぶらと歩いていた。なんとなく目を向けた先にいたのは小さな男の子。どうやら持っていたボールを落としてしまったらしく、ボールは道路の真ん中に転がっていた。

察しのいい人ならもう分かるだろう。ボールを拾おうと男の子は道路に出るのだけれど、そこに1台のトレーラーが！

「危ないっ！」

僕は無我夢中で走り出した。男の子はボールを拾うも、トレーラーがすぐ近くまで来ており逃げても間に合わない。僕は咄嗟に男の子を歩道に突き飛ばして助けるも、代わりに僕の体が轢かれる結果になってしまった。

意識が飛び、目の前が真っ暗になる。僕は完全に死を確信していた。

しかし僕が目を覚ますと、そこは真っ白な空間だった。全くもって意味が分からず取り乱していた時に、あの人は現れた。

「気が付いたかな、青年君？」

声が出た方向を向くと、そこに立っていたのはグレーの上着に黒いズボン、赤いアンダーウェアを着た男性が立っていた。僕の予想が正しければこの人は…

「貴方は… 檀 黎斗神”さん!?”」

「昔の私はそう名乗っていた…だが今は違う。」 九条 貴利矢”との

戦いに敗れて死んだ私は、もう神ではない。今の私はただの「檀黎斗」だ」

まさか黎斗さんが目の前に現れるとは思っても見なかった。けど、僕にはまだ気になることがあった。

「そんな貴方が何故ここにいますか?」

「あの後、私は本物の神の元で助手として仕えることになったのだ。本来ならば、真の神が君のような死人の前に現れるのだが…今回は訳あって私が代理を務めている。これで理解できたかな?」

「は、はい…」

あのエキセントリックな人が大人しく従っている真の神様。僕はそれがどんな人なのか気になった。

「さて、次は私の番だ。薄々気付いているとは思いますが、君は男の子をトレーラーから庇って死んでしまった」

「ですよね…」

「しかし、君の人生はここで終わらない。君にはやって貰うべきことがあるからね」

「と言いますと?」

「君は“プリキュア”と呼ばれし少女達を知っているかな?これから君にはプリキュアの世界に向かい、彼女達と一緒に戦って欲しいんだ」

「ぼ、僕がですか!?!」

プリキュアの存在は知っていたが、僕が彼女達と戦うという事はどうしても信じられなかった。

「見たところ、君はかなり正義感の強い男のようだ。見ず知らずの少年を、自分の命を顧みずに庇う。そんな君にこそ、果たして貰うべき役割なんだよ」

「けど、僕には戦う力なんてありませんよ?」

「心配には及ばないとも。これを受け取りたまえ」

黎斗さんは静かに右手を差し出す。すると右手の上に黒い光が現れ、僕の目の前にやって来る。僕はそれを両手で受け取った。

「その光には嘗ての私のような、悪の仮面ライダー達…所謂“ダーク

ライダー”達の力が詰まっている。この力を使い、プリキュアの新しい味方となつて貰いたい」

「仮面ライダーの…力…」

「それと、幾つか補足もしておこうか。君と契約しているミラーモンスター達に君が補食されることは無いし、強力な副作用を持つライダーに変身してもその副作用は発生しないから安心するといい。他にも、渡した変身アイテム達には既に君用にイニシヤライズが施されている。それらのアイテムは、全て君にしか扱えないよ」

「何から何まで…ありがとうございます！」

「構わないさ。これまで犯してきた罪を考えれば…こうする事ですか、今の私は罪を償えない。そんな私の…」仮面ライダーゲム”の力も、君なら使いこなせると信じているよ」

「わかりました。貴方達の力…必ず使いこなしてみせます！」

「ではこれから、君をプリキュアの世界へと送り出す。君の将来が闇に包まれないことを、私も祈っているよ」

そして、僕の目の前は真っ白になった。

これが、僕が仮面ライダーとしての原点だ。今はレストランAGITΩの店主を務めながらも、この世界に時折出現する仮面ライダーの怪人達を倒している。

黎斗さんが僕を信じて託してくれた力を、絶対に悪いことに使わない。僕は改めてそう決意した。



レストランの営業が終わり、僕は部屋に戻ろうとしていた。すると、店の電話が突然鳴りはじめる。僕は受話器を取って電話に出た。

「はい、レストランAGITΩです」

『お前が”琴葉 虹”だな?』

「ええ、そうですが」

電話から聞こえてきたのは、変声機で加工されたような変わった声だった。

『お前がこの世界の仮面ライダーであることは分かっている。今から私が言う住所に來い。面白いものを見せてやろう』

「…いたずら電話ならお断りですよ？」

『その妙な間は凶星のようだな。まあ、来てみるといい。住所は…』

僕は電話の主が言った住所をメモに取り、バイク“マシンディケイダー”に乗ってその場所に向かった。



虹がバイクに乗ってやって来た住所にあったのは、見るからにボロボロな廃工場だった。虹はバイクから降りて、中に入ってみる。

「ここに一体何が…っ！」

突然謎の気配を感じ、虹は身構えた。すると工場の奥から2人の人影が現れ、外から差す月の光でその姿が明らかになった。

1人は白いアンダーアーマー、その上にゴリラを模した黒いアーマー、頭部には青く吊り上がった複眼をした仮面の戦士。もう1人も同じく白いアンダーアーマー、しかしその上は青と黄色の蜂を模したアーマー、頭部に猫を思わせる黄色い複眼の戦士がいた。虹はその2人の姿に見覚えがあった。

「仮面ライダーバルカン パンチングゴング」に、“仮面ライダーバルキリー ライトニングホーネット”か。これが面白いものかな？」

虹はそう言ってほくそ笑むと、何処からかベルトとバックルの付いた赤と黒の短剣型のアイテム“ザイアスラッシュユライザー”を取り出して腰に装着する。

「折角だ。これの試運転にも付き合って貰うよ」

そしてズボンのポケットから真紅に輝くデバイス“バーニングファルコンプログライズキー”を取り出して、起動させる。

『インフェルノウイング！』

プログライズキーから音声と不死鳥の鳴き声が聞こえると、虹はスラッシュライザーにキーを装填する。

『バーンライズ！』

『Kamen Rider…Kamen Rider…』

プログライズキーが認証されて待機音が鳴ると、キーを展開させる。そして虹はあの言葉を呟くと同時に、縦に薙ぎ払うようにトリガーを引く。

「変身」

『スラッシュライズ！』

するとスラッシュライザーから赤い不死鳥のライドモデルが出現すると、背後から虹を何枚もの翼で包み込む。そしてライドモデルが翼を広げて消滅すると同時に変身が完了する。

『バーニングファルコン！』

『The strongest wings bearing the fire of hell.』

そこに立っていたのは、黒いアンダーアーマーの上から深紅の不死鳥を思わせるアーマーに覆われており、頭部には緑色の鋭い複眼に赤と黒の鳥を模したマスクを付けた仮面の戦士だった。

その名は“仮面ライダー迅 バーニングファルコン”

「さて、軽く相手をしてあげようか」

そう言つて迅が突撃すると同時にバルカンも突撃する。両者のパンチが激突する間、バルキリーは上へと飛び上がる。それを見た迅はキックでバルカンを蹴り飛ばすと、バルキリーと同様に空を飛ぶ。

するとバルキリーは、身体から無数の蜂型ミサイル“ヘクスベスパ”を放つ。迅は猛スピードで滑空することでミサイルを翻弄するが、下からバルカンが“エイムズショットライザー”で援護射撃を行う。バルカンの射撃を、迅はバツクルから外したスラッシュライザーで防御する。

そして迅は急降下して地面をスレスレで飛び、バルキリーのミサイルも迅を追跡する。すると迅はバルカンに突撃するが、バルカンの目の前で急上昇する。蜂型ミサイルは迅のスピードに対抗出来ずに味方のバルカンにダメージを与えてしまう。続けて迅はバルキリーを猛スピードで短剣で切りつけ、バルカンの傍に墜落させる。

「中々やるね。けど、僕には及ばない」

迅は短剣に装填されたプログライズキーのボタンを押して、同時にトリガーを引く。

『インフェルノウィング！』

『バーニングレイン！』

すると迅は、無数の炎の斬撃を飛ばして2人のライダーを滅多切りにする。そして2人が上半身を起こした隙にトドメの大きな斬撃を喰らわせる。

バーニング

レ

イ

ン

直後に2人のライダーがいる場所から大爆発が起こった。燃え盛る炎の中、迅が近寄った先にはバルカンとバルキリーは影も形もなかった。

「誰かが変身していた訳ではないのか…だが切った時に確かに手応えはあった」

「もしかすれば…いや、まさかな…」

迅は一人でそう呟くと、天井に空いていた穴から飛び去って行った。

その後、炎が消えた廃工場内に残っていたのは

バルカンとバルキリーの顔が描かれた2枚のカードだった…